はじめに

病気になったとき、私たちの体の中では一体何が起きているのでしょうか？

この素朴かつ根本的な問いに対して、圧倒的な解像度で答えをくれる学問があります。それが「病理学」です。病理学を知ることは、霧に包まれていた病気という〝モヤっとした存在〟に対し、高性能なレンズを手に入れるようなものです。それは医療従事者にとっての揺るぎない**拠りどころ**になるだけではありません。医療の専門家でなくても、病気の仕組みを正しく知ることは、巷に溢れるさまざまな病気の情報に惑わされず、自分や家族を守るための**確かな判断力**という武器になります。

しかし、その一方で「病理学」という言葉に、どこか冷たく、ネガティブな印象を持つ方も少なくありません。特に、医学部で必死に学んだ経験がある人ほど、その傾向は強いようです。事実、国内外の調査でも、医学生がぶつかる**最初の壁**は病理学だと言われています。多くの学生が「臨床医にも病理の知識は不可欠だ」とは理解しつつも、その半数以上が「膨大な量に圧倒される」「苦手だ」と回答しているのです。

実は、私自身もかつてはその壁の前に立ち尽くした一人でした。

学生時代、厚さ5センチくらいもある国際的な教科書『ロビンス病理学』を目の前にして、途方に暮れたことを今でも覚えています。先輩方からは「試験に出る所は決まってるから」と言われたり、逆に「ロビンスくらいは読まないとね」と発破をかけられたり。でも、そんなアドバイスを聞けば聞くほど、病理学の面白さからは遠ざかっていった気がします。

私はその後、病理医・研究者としての道を歩み、気づくと35年の月日をこの世界で過ごして来たことになります。そしてこのキャリアの半分以上は膵臓の腫瘍を専門にしてきましたが、深く掘り下げていくうちに、あらためて面白い事実に気づいたのです。それは、特定の臓器に特有だと思っていた現象が、実は他の臓器、ひいては人の体全体に共通する**生命のルール**に基づいているということでした。

病気によって細胞が傷つき、反応し、必死に適応しようとする……。この生命のルールは、太古の昔から変わりません。この根っこにある原則さえつかんでしまえば、一見複雑に見える病気も、一つの物語（ストーリー）として読み解けるようになります。「こんな本が、自分が学生だった頃にあればよかったのに。」本書は、そんな思いから生まれました。

専門用語の暗記や細かな理論だけの基礎医学としてではなく、目の前の患者さんの病態を読み解くための**臨床に直結した武器**として病理学を捉え直す。そのために、病気の考え方を5つの**パソロジー思考**として整理し、まるで小説を読むように楽しく読み進められるように工夫しました。そして各章の後半には関連した症例をパソロジー思考に基づいて考察するという試みも行っています。

一度**パソロジー思考**というレンズを手に入れれば、病気の見え方はきっと変わります。暗記に追われる日々はもう終わりにして、生命が奏でる「なるほど！」という納得の物語を、私と一緒に読み解いていきませんか。

では、講義をはじめましょう！